

大都市郊外型農業体験学習を通じた学生の 教育効果に関する研究Ⅰ ～アクティブラーニング実践からの学び～

A Study of the Educational Effect on Students Through the Experiential
Learning of Agriculture In the Suburbs of a Big City

共同研究メンバー

○野坂美穂*、小西英行*（○代表、執筆者）

Keywords : Organic Agriculture, Educational Effect, Competency

1. 研究の目的

本 AL は、多摩大学近隣での農業体験学習を通じて、学生の食と農への意識を高めると同時に、農業体験学習が学生のコンピテンシーにどのような影響を与えるのか、その教育効果を明らかにすることを目的とする。

農業体験学習による教育効果に関する既存研究の多くは事例紹介が中心であり、定量的・実証的に分析した研究は極めて少ない（山田，2016）ことが指摘されている。さらに、既存研究の主な対象者は小学生がほとんどであり、大学生を対象とした研究は少ないといえる。そこで本研究では、大学生を対象とした農業体験学習がコンピテンシーにどのような影響を与えるのかを明らかにする。

2. 研究の意義

農業体験学習を通じた教育効果として、期待される点は以下の通りである。

(1) 食農教育・職業教育

本 AL は「食農教育」の一環として位置づけ、都市部に居住する学生が、農業体験学習を通じて、農業や食に対する意識が高まることを期待する。食農教育における効果には、第一に、自然を大切にする心、驚き、感動等の日常生活の中では得られないものを得ることができること、第二に、自分達の手や体を動かすという体験に裏付けられたものの見方や問題解決能力がつくこと、第三に競争の原理が過度に働かないため、ゆとりをもった活動ができること、第四

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

に生産から消費の過程を知らない子供たちが生産労働の価値、食物の大切さ、生産者への感謝の精神を体得するための良い機会であることが挙げられる（佐々木，2008）。

また、農業体験学習を通じて、学生が農業への感心や理解を深めることによって、卒業後の農業ないし農業関連分野や食品分野への就労という職業の選択肢の広がりも期待される。

(2) コンピテンシーの変化

昨今、社会に出るために必要な能力の一つとして、大学生のコンピテンシーの向上が求められている。このコンピテンシーの獲得の機会の一つとして、「自分自身の直接経験による学習」が挙げられるが、農業体験学習はその獲得につながる可能性が考えられる。また、集団での農業体験学習は、コミュニケーションの促進および仲間意識の醸成や助け合い等が期待される。以上の期待される教育効果については、参与観察、活動前後のアンケートや振り返りによって明らかにする。

3. 先行研究

農業体験による教育効果に関する研究には一定の蓄積があるものの、これら先行研究の主な対象者は小学生がほとんどであり、大学生を対象とした研究は少ない。

板倉他（2008）は、大学生の農業体験事例に関する研究は少なく、手法や教育効果など不明な点が多く、特に教育効果の性質上、情緒面以外での教育効果は明確にされていないことを指摘したうえで、農業実習に参加することを通して、参加者の意識や態度の変化、農家の意向などの把握について、アンケートにより明らかにした。宮地（2013）では、「中山間地域農業参画プロジェクト」における学生の事後評価の結果から、農業が大学生にとって意義のある活動であることが示されているが、その教育的効果については論じられていない。山口（2016）では、大学生を対象とした研究は教育的効果自体に着目したものが多く、教育的効果に影響する諸要因は十分に明らかにされているとは言えないことを指摘したうえで、効果的なプログラムを開発するための基礎的知見を得るために、農場実習を取り上げ、栄養学を専攻する大学生の教育的効果に影響する要因について、アンケートを通じた検討がされている。居崎他（2014）では、大学生を対象に質問紙調査を行い、農業体験を通じて、「将来展望」や「キャリア意識」、「自尊感情」といった心理的側面においての発達的变化が促されるかどうかの検討が行われた。

以上の先行研究と本研究の違いを以下で整理する。

第一に、先行研究では、農業を通じた教育効果を明らかにするために「コンピテンシー」の変化を明らかにした研究は見当たらないと思われる。例えば、インターシップを通じたコンピテンシーの変化に関する研究（矢崎・中村，2013）や社会福祉実習経験を通じたコンピテンシーの変化に関する研究（矢崎・中村，2018）など、大学生の「自分自身の直接経験による学習」を通じたコンピテンシーの変化を明らかにした研究は存在するものの、農業体験学習を通じたコンピテンシーの変化を明らかにした研究は見当たらないため、本研究では、コンピテンシーの変化を行うことを試みる。

第二に、先行研究では、大学から離れた場所である農村等での非日常的な農業体験などが多く、大学生活と並行して日常的に農業を行っている事例は少ない。農村等での農業体験では受け入れ先農家が存在し、その農家の方々との交流に意義があるため、学生の満足度も高い（板

倉他, 2008; 宮地, 2019) ことが明らかになっている。本研究では、農村ではなく、大学近隣の農地での定期的かつ日常的な農業活動によって、学生にどのような教育効果がもたらされるかを明らかにすることを目的としている点に、先行研究との違いがある。

また、これに関連して、「都市農業」の視点からの農業体験学習の効果という点も重要と思われる。都市農業の六つの機能のうちの「交流創出」・「食育・教育」に着目し、それらを通じて農業体験学習がどのように大学生に影響を与えるのか、また大学生とその他世代の交流による効果なども研究の対象に含めることとする。

3. 活動報告

大学から徒歩 10 分程度のところにある体験型市民農園「多摩有機農法塾」の一区画を借りることができ、2020 年の 4 月より農業を開始した。コロナ禍によって、春学期の学生の学外活動は制限されたため、教員 2 名と一部の学生でのスタートとなった。

この市民農園の利用者の大半はリタイア世代の高齢者であり、また農業の初心者から十数年にわたるベテランまで様々である。月に 1 回程度、この市民農園の貸主である農家の方による植え方や育て方に関する講義があり、講義後は利用者からの質問タイムが設けられている。また、必要に応じて個別にも指導をいただけるため、初心者でも大きな失敗をせずに育てることができる。さらに、貸主による指導だけではなく、分からないことがあれば経験の長い利用者の方が丁寧に教えてくださることもあり、利用者同士の交流も生まれている。

4 月には、ジャガイモ、サトイモ、枝豆、トウモロコシ、インゲン、オクラ、ナス、ピーマン、シシトウ、キュウリなどの種や苗を植え、夏前にはサトイモ以外の野菜を収穫した。以上が現時点での活動報告であるが、秋学期以降は、本格的に農業 AL を始動させる予定である。



参考文献

- ・居崎時江・谷伊織・小島雅生・ほしの竜一（2014）「農業体験学習が大学生の自己意識に与える影響効果測定のための尺度作成の試み」『東海学園大学研究紀要』, 第 19 号, pp.3-16.
- ・板倉礼実・中塚 雅也・宇野 雄（2008）「大学生を対象とした農業体験学習の意義と課題 - 神戸大学農学部を取り組みを事例として -」『神戸大学農業経済』, 第 40 巻, pp.33-40.
- ・佐々木 正剛（2008）『生涯学習社会と農業教育』 大学教育出版。
- ・宮地忠幸（2013）「大学生による体験を通じた農業・農村学習—2009・2010 年度の活動記録と事後評価—」『国土館大学地理学報告』, 第 21 巻, pp.79-92.
- ・宮地忠幸（2019）「大学生と農村住民との農業体験を通じた交流活動の意義と課題—「国土館大学西谷学校」を事例として—」『経済地理学年報』, 第 65 巻, pp.61-81.
- ・矢崎裕美子・中村信次（2013）「インターンシップ経験によるコンピテンシーの変化 - 動機と研修の型からの検討 -」『日本福祉大学全学教育センター紀要』, 第 1 号, pp.3-9.
- ・矢崎裕美子・中村信次（2018）「社会福祉実習経験によるコンピテンシーの変化 - 動機と実習によるバーンアウトに着目して」『日本福祉大学社会福祉論集』, 第 138 号, pp.63-74.
- ・山口創（2016）「農場実習における大学生の知識習得・意識変化に影響する要因の分析」『農業経済研究』, 第 88 巻第 3 号, pp.345-349.
- ・山田 伊澄（2006）「農業体験学習の実証分析—教育的効果の向上と農村活性化をめざして—」『農林業問題研究』 第 42 巻 第 1 号, pp.101-104.